

「歴史の空白」終戦時の海軍を長野で探る・・・（その1）

土屋光男（9組、千曲市在住）



写真左は筆者近影、右は高校卒業アルバムから

今年は後期高齢者になりますが、これまでの人生で一番充実して嬉しく思います。

長らく同期の皆様にはご無沙汰してきましたが、この度、市村到君（4組）、小山田秀士君（7組）、小宮山健一君（3組）の橋渡しもあり、65期HP編集担当の上原昇君（2組）を通じて近況を報告できる運びとなりました。どうかよろしく願いいたします。

以下、終戦当時、大本営（海軍部）の長野県への疎開・移転などの調査・研究について取り組んできた報告ですが、少し長いので3回に分けての掲載となります。

どうして取り組んだか（調査・研究を始めるキッカケ）

私立篠ノ井旭（現長野俊英）高校に勤めたのが昭和46（1971）年でした。数年して生徒の急減で廃校の危機に瀕しましたが、生徒を増やすべく何とか乗り切り、更に一層信頼されるために地域に打って出てあらゆる取り組みを展開しました。

その一つが松代の地下壕への取り組みでした。県下では初めて沖縄修学旅行を実施した際、ガラビ壕（野戦病院となった）での「戦争がまだそのまま残っている」と生徒が強烈なショックをうけた体験がきっかけです。地元の松代の洞窟（現象山地下壕）の現地調査に赴き、長野市に「貴重な戦争遺跡として公開を」と働きかけたのが昭和60（1985）年のことです。それから足掛け5年、平成2（1990）年に、当時の長野市の塚田市長の英断でそれが実現しました。 ※このことはネットの「松代大本営」に紹介されています。

以後、長野俊英といえば「あゝ、あの松代大本営の取り組みで有名な」と知られるようになりました。延べ数十人への聞き取り調査、そして見学者への案内、観光客のゴミが迷惑と言われるとゴミ拾いをするなど、生徒と頑張りました。

一方、校内では「学校の一層の発展のためには県からの退職校長でなく生え抜きの職員から」とまさしく青天の霹靂で、この私に白羽の矢が立ちました。さんざん悩みましたが、覚悟を決め、先ずは教頭となり、それ以降はそれまで以上に四六時中、学校のためにと全力を注ぎ続けました。

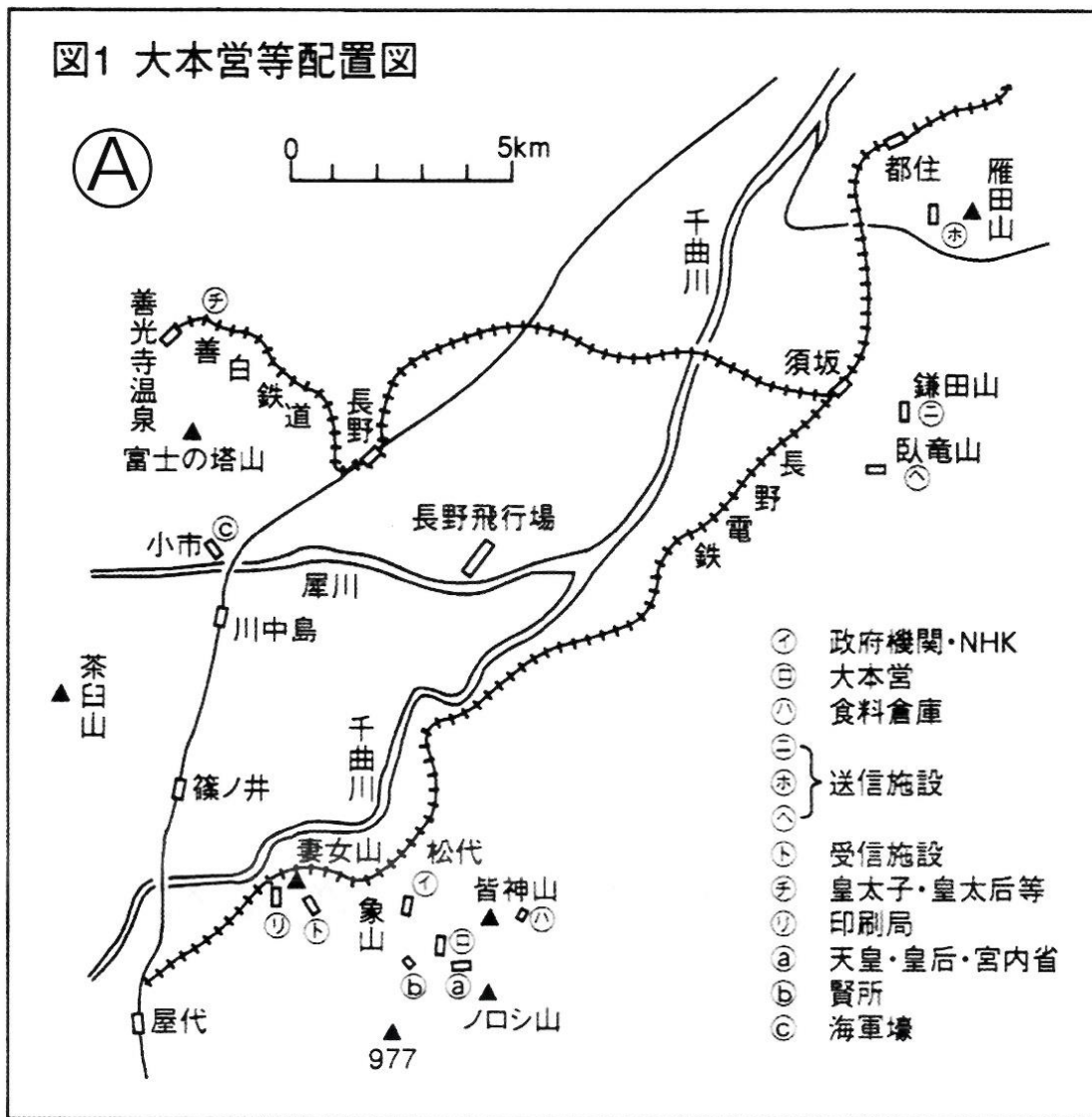
7年程励んだある日、高校の新理事長に呼ばれ、いきなり「退職せよ」と告げられました。

目の前は真っ暗になって、心が折れ、どんどん落ち込みました。何も手につかなくなり、松代のことも一切嫌になり、怖くさえなりました。車の運転ではとても松代方面には行けず、やがて運転すら出来なくなりました。このまま人生が終わると悩み嘆きつつ数年間が過ぎました。

(このことは記述する事には大分躊躇しますが、松代にあれだけ拘っていたのに、今は安茂里に鞍替えしたのほどうしてなのかと疑問に思われた時の答えにもなると考え、敢えて書きます。)

1986年(昭和61年)からずっと使用されている 「松代大本営等配置図」

(『本土決戦』 土門周平ほか 光人社NF文庫) より



やがて妻の励ましもあり、少しずつ少しずつ元気が出てきて、未だ生かされている自分探しのため、元気な時の自分をよく知る中学の恩師や高校時代の親友市村到君を訪ねました。

八十路の恩師から強く激励され、農業で山里を守る市村君からは元気をもらい、「こんな俺でもまだやれることがある、そうだ、大本営などの調査は千曲川右岸ではかなり進んでいるが、左岸や犀川沿いのそれはまだ手つかずだ。それに取り組もう」と心に決めたのでした。

以上

(2023年1月23日、その2に続く)